


2021年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2022/9/30

団体名	認定NPO法人子どもと文化のひろば ぶれいおん・とかち		活動タイトル	リアルに「つながる」「あそぶ」「まなぶ」子育て親育ち活動	
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景		
●望ましい社会状況(ビジョン)	<ul style="list-style-type: none"> ●親だけでなく、地域みんなで子育てを担う“共同養育”スタイルである。 ●コロナ禍等においても、不安な子どもや親に寄り添って励まし合える関係性が持てる。 ●五感を使い、のびのびと自由に遊び込めるような、子どものあそび環境が豊かである。 ●多様性を認め合えるコミュニティーである。 		<p>土曜開放 「子ども夏まつり」</p> 	<p>子ども会の活動を休止していた町内会と連携し、地域の公園で夏まつりを実施。市内高校の学園祭グッズを譲り受けたり会員手作りの縁日コーナー、子ども企画による出店などに、会員や地域の約200名が参加した。地域の人の顔が見える交流の場が求められていることを実感し、今後も協働で取り組みを継続したい。画像は盆踊りに集まっているところ。</p>	
●団体の社会的役割(ミッション)	<ul style="list-style-type: none"> ●地域の多世代が支え合って、子どもも親も共に成長し合える場をつくる。 ●“子どもはあそびで育つ”をスローガンとし、自由にのびのびと遊び込める環境づくりに創意工夫を凝らす。さまざまなあそびや体験を通じて、緩やかに繋がりが合い、支え合える関係性を築く。 ●子どもへの温かいまなざしを共有し、子育てにやさしいまちづくりに寄与する。 				
●団体の活動基盤	<ul style="list-style-type: none"> ●人的資源：子どもの成長発達や子育て支援に関する学びに意欲のある人、粘り強く課題解決に取り組む意欲のある人材を確保し、団体の安定的な運営を担える人材を育成する。 ●物的資源：活動拠点として、学校統廃合後の廃校利用や地域の児童館機能を持つ施設等を確保する。 ●活動資金：受益者であり活動の担い手でもある正会員の月会費を減額し、寄付の割合を増やす。市の子育て支援拠点として認可を受け、事業委託費を得る。 ●ナレッジ：NPO中間支援団体、自治体、こども環境学会や関連団体とのネットワークにより、活動に有益な情報やスタッフ研修の情報を得る。 				
■ 活動報告			■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)		
<p>コロナ禍であったが、ビジョンやミッションを常に意識して、積極的に活動を実施することができた。●土曜開放では月一回の自由あそびの広場の他、地域の町内会や高校等との連携により、公園にて「子ども夏まつり」を実施した。●小～高校生の遊びと自主企画の場・子供連合協議会CUでは、自由あそびの他、子どもたちが主体性を発揮し、予定していなかった子ども主催企画が実施されたり、子どもたちからNPOの活動内容に対する意見が届くなど、活発な活動となった。●小さなあしあとの森では、市街地に近い森の中であそび活動は予定通り実施し親子共に満足度が高かったが、「親じかん」（親のまなび）は、自然の中であそび活動内で学びのニーズが満たされたこともあって、参加申込がなく2回は休止した。●小学生以上対象のお泊り会では、コロナ禍の影響を特に受ける形となった。冬のお泊り会は直前に感染が拡大したため日帰りに変更して「そり遊び」として実施した。夏は、感染が比較的落ち着いた時期であったため、抗原検査キットを活用し、リスクを最大限減らすことで安心感を持って実施することができた。●赤ちゃんの日は、妊婦と0才児親子に向けて、経験や知識もなく孤立し不安な子育てに、対面でより安心できる居場所を提供。少人数であったが、必要な親子のために月2回開催した。</p>			<p>実施状況については、コロナ禍であっても感染対策に十分配慮しながら、ほぼ計画通り実施することができた。コロナの影響により参加者は想定より少なかったが、必要な人に必要な場を提供することができた。参加者同士の交流を促す各スタッフの心がけによって、お互いの子どもを見合い、気にかけてあげたり、子育てをみんなで支え合う「共同養育」スタイルや、不安な子どもや親に寄り添って励まし合える関係性が持てた。自然の中で遊ぶ活動により、五感を使ってのびのびと自由に遊びこめる環境を提供でき、与えられたイベントに参加するだけの消費型ではなく、子どもも大人も主体性を持って自ら楽しむ経験が得られた。すべての事業に多種多様な人たちが関わることによって、多様性を認め合うための土壌が醸成されつつある。コロナ禍であっても、目標とするビジョンやミッションに向かって、多彩な多世代異年齢を対象にした活動を継続したことで、それぞれの目標が達成された。</p> <p>また、団体創立から50年を迎える目前で、現在の運営上の課題が顕在化してきたが、振り返りから始め、課題の整理やその理由を考え、今後も持続可能な組織となるようしくみづくり改革に着手した一年となった。</p>		
■ 事業を通じて得られたノウハウ			■ 望ましい社会状況を達成するための課題		
<ul style="list-style-type: none"> ●コロナ禍における企画実施のノウハウが得られた。スタッフや参加者の健康管理や、屋外を積極的に活用すること、抗原検査キットの使用など、コロナ禍であっても工夫しながら企画実施できるようになった。 ●スタッフや町内会、高校など、他団体との連携関係を築くためのノウハウが得られた。自分たちのメリットだけでなく、先方にとってのメリットを考えた上で提案することが必要である。 ●会議で発言しにくいという声を受け、出席者間のコミュニケーションや風通しをよくする手法として「チェックイン」（会議の前に、参加者のありのままの状態や感じていること、会議への意気込みを正直に話して共有する時間のこと）を用いた。 ●ニーズの違う個人が150世帯以上集う団体において、団体の目的や理念を意識し共有する機会を持つ大切さと、意思決定のプロセスを明確にする重要性を再認識した。また、NPOアカツキのファシリテーションにより、振り返りの手法を学ぶことで、互いの認識の違いや感情のすれ違いなどに気づく機会の重要性を感じた。 			<p>これらの望ましい社会状況は、日々の積み重ねによってのみ達成されることであると考えられる。そのため、常に自分自身をはじめ、社会状況、団体の目的や理念、活動内容を振り返り、これらの望ましい状況に近づいてきているか、考え行動し続ける姿勢が必要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地域の行政、企業、他団体等との協働を進めるため、事業実践を継続しつつ、広報力や企画提案力をつけることが必要。団体をリードしていく人材の育成も急務である。 ●参加者に対して丁寧な関わりが求められ、また会員との情報共有をスムーズにする必要があるため、スタッフのコミュニケーションやファシリテーション、広報スキル向上のための研修機会を設ける。 ●事業費、特に人件費の確保は、会員数拡大による会費増収が大きく見込めない今、単年度ごとの助成金に頼っているが、事務の煩雑さや不安定さがある中で大きな課題である。子育て親育ちの地域拠点として、行政や民間からの資金的支援を求めている。 		
			■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）		
			この1年間の活動を通じて	コロナ禍であっても、子育て親育ちのためにとぎれなく人と人が交わる場づくり、また、子どもたちが主体的に遊び、仲間づくり、挑戦したいことに取組めるリアルな多世代異年齢の居場所づくり	を達成しました。
			■ 受益者の具体的な変化（自由記入）		
			<p>「わたしたち、ほんとうにしあわせよね。マスクをはずして、こんなふうにお友だちとあそべるなんて。○○ちゃんもそう思う？」</p> <p>夏のお泊り会（抗原検査キットを使用し野外にて実施）で、スタッフの耳に聞こえてきた1年生女の子たちの会話です。</p>		